俄羅斯紀聞四集

九

ル 8
2994
39

ル 87
3038
39
ル8 特
2994
39

俄羅斯膨度序

俄羅斯膨度二卷

序三十年前所陸續

譯俄羅斯國勢之力主

治政教民風而作者也
既而小大概若水行充
業學清素而以佐而爰
国之志與予同調也然
正而於水下之抵評爲
爾時予史学之黔語疎
律更信荒乎今日而泰
西列国下新勢迫要今

时不作尔时
悍者性係羅
摧抑俄羅斯戎鋒可以
上下奠枕營及出師卓
孝哀俄羅形成係之論
拂菜京者以拂菜京卜
於撥而的時方峯陸奥
俄羅彷彿拂菜京之奥

情之為俄羅斯人盛衰
故波及之非主拂蒙家
而言也願予人毋為
之芝之爾時以弭禍同
永裁情者甚持論法
與予同憚之固未月推
移物換事流俄羅斯進
取之大決確然自保

守備業日益
日深強自他諸國其大
小種有多要是西強殊
英吉利今已經接西度
拓蔓南及海南諸島勢
沙平穩以供我用之費
年於東洋拓建他殖民
為些而十急事較之俄

屈於东俗与我接境而
嫉其贤人与言单意在
国庭援邈不相及大有
涇庭妙可虞也夫国家
动动千除强三五乘而
形势妙变况三十年为
一世与其感一世而
国势自若不变者乎况

中遭下於攫攫而例亂
洞為素面一大洞大國
眞如小國蓋粉自毫范
械蓋精爾爾蓋粉爾乎
尚是時願視文化事者
著書妄妄於為物弁髦
乎是者錄柴拍今也泰
而形勢徒回一大變而

学士大夫於
彼為以爻者
免要系於適
陰未艾戒勇
之校謀不
衍循〻不可
少思学
士大夫未為過爻也上
乎日今莫吉
俄羅斯次〻
強弱妙論

教育貧困は苦制度の因
故仍存諸家中未能遽
罷廢火云
明治四年五月

然和蘭人後

俄羅斯情形臆度巻之一目録

康熙年中雅克薩城合戦之事
清朝俄羅斯交易之事
清朝俄羅斯弦弧之事
満州人俄羅斯人氣性之事
俄羅斯人交易之顔ハ心底之事
俄羅斯敵ト国ヲ滅ス事
俄羅斯刑罰之事
俄羅斯一夫一婦之事

西洋妄小帝號ヲ稱セサル事

莫臥兒ノ事 附

西洋諸國當時ノ形勢ノ事

康熙年中羅刹城合戰ノ事

羅刹亞益々東方ニ向テ張出スニ敢テ遮リ咎ム
ル者ナシ

斯ノ如クニシテ終ニ東海ニ近キ東韃ノ界ニ至リ
東韃ハ現ニ支那ニ領セル地ナリ莫斯哥未亞人
ヲ知ラサルニ卒尓ニ其境内ニ來ルノミニ非悼リ畏
ル、所モナク城ヲ築キテ其地ヲ領セントスル觧ヲ
見セテ大ニ驚キ心力ヲ盡シテ是ヲ遠フ避ケン
トゾ謀リケル

然レ𪜈此地固ヨリ荒蕪ニシテ無人ノ境内ナレ
ハ莫斯哥未亜人服セズシテ曰ク韃人コヽニ住ム
ハ固ヨリ韃ノ地ナリ今我既ニ来テ住メリ是
即我ガ地ニ非スヤ天然ノ大法斯ノ如シト云テ
言語ニモ畏レス威勢ニモ屈セズ
韃人益々安カラズ思ヒ兵ヲ発テ是ヲ攻メ其基
趾ヲ毀テ夷ラリル亅両次ニ至リシカ𪜈莫斯哥未
亜人復改築亅愈堅固ニシテ攻撃ト雖モ終ニ
動カズナリヌ

此時既ニ大事ニ及ヒヌ然レ𪜈互ニ軍ヲ起シテ雌
雄決セン𪜈ニ於テハ双方共ニ艱難多シ殊ニ莫斯
哥未亜人ハ本國ヲ離レ亅一千里ニシテ道殊ニ
容易ナラズ故ニ和睦ヲ為メ共ニ無事ナラシヽヲ
願ヒケル𪜈ニ和議大半調ヒケレハ先ツ支那ノ帝都北
京ヲ去ル亅四百五十里セリンゲト云ヘル邑ヲ撰ヒ
テ交會ノ場トシ両國ノ使者ヲシテ此地ニ會
合セシメテ其事ヲ成就セントス
交會ノ地甚遠キ故ニ支那ノ患ヲナスナリトテ

人ゝ相議シ改テ子ブチヨウト云ヘル處ニ定ム此地
莫斯哥未亜人ノ城邑ニシテ北緯五十一度四十
一分北京ヲ離ルヽコト三百里十リ
然ニ會合ノ席ニ臨テ両國ノ使者各不遜ニシ
テ盟主タラントヲ爭ヒ支那ノ使者殊ニ傲慢
ナリケル程ニ其議調ワズ
是ニ因リテケルヒルロン莫斯哥未亜ノ陣ニ往キ数日
止リ居テ様ゝ演説シ通商ノ利益ヲ言ヒテ動
カシケレバ莫斯哥未亜ノ人コレニ傾キ秋月三日
再ヒ事ヲ取行ヒナルヘキ限リハ支那ノ方ヲシテ満
足セシメケレハ和議終ニ全ク調ヒケリ 以上東砂葛記
雅克薩会戦ゝ事唐土ゝ書ハ即時破滅又
ハ窘迫乞降ホ所ありて誠ニ俄羅斯を手ニ入
ゝ如弱敵ゝ侮ニ足ヘ(ヘ)ゝ然ルニ他國を
蟲螻蛄ゝ如ク思ハ唐人ゝ病なれハ其中ホ
誠ニ信用し難し則唐土ゝ書ニ就テ考ニ康
熙二十二三年ゝ比彭春大將ゝして雅克薩
ゝ城ヘ攻しに羅刹一旦降参セリ彭春ハ揚ケ

北又堅固に守りて依りて馬龍江將軍薩布素大將として再攻けること二十八年に落城せり前後七年の間掛りしかども清人の中に容易ならざるに所の江南を取り李自成を滅すと共に所の蒙古の今東砂漠記すなわち俄羅斯の方より餘程強みなり少し清を畏憚たる所の只に西國人民を雖俄を畏ひやすくなる談せしめり是俄羅斯の勝軍を謂つるなり然に是迄未信用なる雖きこと其訳を人情傍

華同彩を見る飛鼎員するまたは書蘭書を譯せしめり和蘭支那を疎遠まして魯西亞を近鄰交通の國なれば自然鼎員を言ふ一時に戦雖克薩の城を破却せられし上千里孤手の格爾必齊河に界碑を立しかば俄羅斯の員旅あり然に其節實に清人の威勢に畏れ敵對成難して降を強すやはり又清人も畏るるに足らざれば一且は功を貪らず進退の時節を待つて巧なり

盤水先生曰く人情依怙贔屓ノ高論ノ如シ乗砂菅記原書並ニ譯者ヲノ詳ニセス和蘭人モ傳聞ノ記スル所ナレハ信疑相半スヘシ併支那ト陳遠魯西亜トハ交通ノ國ニ贔屓ノイアルヘシトノ御考イカヽアルヘキヤ魯西亜弦大加畏服の情ハアルベキナレ共心底ヒイキノ意ハアルマジキカ支那ヲ思ノ鄂羅ヲヨキニ書トリシ尺思ワレス近日詳審ノ訳説出来ル筈ナリコレヲ讀テ再評ニ及ヘシ

清朝俄羅斯ト國ヲ交ル事

古語ニ女雄不並立ト云フ今清朝ト俄羅斯ハ冨強盛大ナル事大抵牛角ヲ勢ヒフレハ表向ヲ和ラキ内心ハ必定互ニ忌嫌ス哀ヒ[illegible]唐土ニ書ヲ考スル康熙中格尔必齊河ニ界碑ヲ建シ以来ハ國ヲ盾ニ抜ヲ[illegible]魯西亜勅使紀行ト云書ニリュス国ヨリ使者ヲウレンツ、ランゲンス北京ニ清主ニ謁シ回道ヲ醫者清主ヲ脈ヲ診セシ事ヲ

札隆御製集ニ俄羅斯ヨリ使者帝ヲ酒宴ニ陪侍
する事ヲ云フ〳〵ヨリ光大夫彼國滞留中キ
リロフ世話ニテ北京ヲ遊覧する筈ニテ不キリロ
フ書ニ邪ヲ戸ヲれく止メけりヲ絶テ西域
聞見録ニ孔隆二十年後阿睦尔薩納ヲ故土
爾扈特ヲ嫌ヲ以テ貿易ヲ絶テ與ヲ通セヲ
ヲ以ヲ是ハ偽聞ヲ誤ヲ左ヲハ一且交易ヲ絶シ
ヲ間もなく本ニ復シ候ヲ何ヲ近比ヲ西
國ヲ使幣交易ヲ不許ヲ事ヲ有ル筋ヲ有リ

是ヲ所謂表向ヲ打和ふきるヲ内心ヲ計里
難シ康熙帝噶爾丹ヲ征伐セシ時俄羅斯砲
手鳥銃兵六百人加勢ヲ為ヲ噶爾丹宣言セ
シヲ康熙帝集ヲ尺西準噶尔ヲ賦阿睦爾薩
納俄羅斯ニ出奔セシ時俄羅斯是ヲ捕カくセ
以ヲ上ヲ阿睦尔病死セシニ依リ兵隊ヲ送ヲ返
セシ事平定準噶尔方略ヲ尺西扨又清人準噶
尔ヲ攻シ時俄羅斯ヲ準噶尔ヲ援兵ヲおヲ約
束ヲ不西方ヲ國境ニ会戦ヲ仕ル也人貢俄兵

るゝ華夷一覽志又以上諸說等皆國
使幣交國ニ國ニハ内ハ夷狄雖敵同
拔ル事アツテ此ル今度俄羅斯ヨリ歸航
セシ工トロフニ番人五郎次口書ニ内ニ一覽セ
世内ニ交易ニ依テ魯西亞ヨリ滿州ヲ攻ムセ
シ事并滿州ニ土地貴ク交易ニ場ヲ求
滿州ヲ承引セハ兵力ヲ以テ奪ハンと巧シ
ヲ以テ又バヨフヲ役人ニ命ヨモンガルヲ任セ
ハ大都ペイキン戦死ス

犯又バヨフ一等の人数ヲハヘイギンヨモ有ト
彩ニ又由ル同書ニアハ俄羅斯人ニ口ヲ
言シ有ハ有ルヲ有ヲフ実情ハ見ル事
一熟ル國ニ形勢城察ヲ其間ニ大ヲ
國ニ有ハ國ヨリ亦陸并吞シ今ヲ東ニ大
ヲ西ニ大ヲ数里ニ有國境ヲ接シテ
五ニ覗ム敵ヲ滅ス事ハ敵ヲ滅ス勢有
愚案ヲ何ト数十年ニ内ニハ國五ヲ干戈ヲ動
シ契丹女直蒙古之夷狄ニシ攻戰ヲ有

事必定ホ〻ん

磐水先生曰ク高説如何アルベキカ蒙古満洲
ニテ彼カ所有トナシタラハペイキン迄モ千ニ
入ルアルベク北京其有トナリタラハ十三省一
統ニモ及フヘキカ併ラ容易ノコトニハアルマシ今
ノ清朝昔ノ元金ハ接壤近隣ナレハ斯クモ
至リシカ鄂羅斯ハ張出ノ勢ヲ極メ分界碑
ニテノ地ヘハトリヨセシナリユヘ無人荒蕪ノ境
ナレハナリ此上ノ処ハイカヾアルベキカサテ天
地間盛衰ノ數アリ鄂羅斯世ニ賢主連綿
メカクハ至リシナレ共又其數ノ尽ル時アルベ
シコレニテノ勢ニテハ此上モ〻ノ念ハアルベキ
ナレ共天命イカヾアルベキカト思フルヽナリ今
ノ火ノ手強キヲ見ル共ハサモアランカト思フ
ルレ共又風変リテ火勢弱クナルコトモアランカ
國廣シトイヘ共衆寡ク且本國ヨリハ陸地
遼遠不便ナルコト多カルヘシ近時佛郎察国ト
ノ大戦軍勝敗未タ定ラス共キケハ如何アル

ヘキカ唯心ニカヽルハ東蝦夷ト隣境トナリタル
ナリ支那ヲ欲スルノ難キニ比スレハ彼ニ在テハ易
カルヘシ預防アリタメキハ我ニアリ彼侵掠ノ
隣境ヲ養シテコヽニアリト欲スル所甚タ厚
ケレハナリ然リトイヘ尼我ニ亦國威アリコレ
亦容易ノ事ニハアラズ唯我ニ在テハ蛮夷モ
テ蔑視セサルヲ希フ所ナリ

清朝俄羅斯強弱の事

俄羅斯百餘年以来漸〻強大ニ赴キ雪際亜を破
リ礼勿泥亜小韃靼を併呑し都児格程を強國
も近来を敢て劣るを知らず宜しく欧羅巴
洲に肩を並る国なり只清朝を宜強盛大な
る事俄羅斯人も毎に称賞せり由此朝人も亦
け〻実に清朝のみ俄羅斯を匹敵も謂つへし
元来清朝を満洲ヲ女直を種族にして強悍勇
健なるを唐土人は迚も及ばぬ所なり故

代に武備をおこなひ時に夷狄を征伐せむ加ふ
人に武勇有り戰に調練せる中に逢唐宗明に
亦及に有る所然し是我俄羅斯ふるゝ如此八孰か
優劣孰か劣とするを未だ其詳なるを知る法
朝に書に有り考すに俄羅斯を屬國とすと書
載せり元和唐土人に向て外國を貶すとて
柄に拘る大閤朝鮮征伐の時に拉致人百戰
百敗せしかも矢張本邦を朝鮮安南同様に思
ふてはなるまじくみるべき仕方なり然れども其書
又就く少に情狀に分て仍る今清人に書
并本邦に雜爲に鈔おして鄙論を附し古
國に強弱を考る資に相前陸雅克薩城合
戰に条有國に交に条併考ふへし
上諭大學士曰俄羅斯之收留叛賊始未嘗不
欲撫而用之及其已死無可希冀然後獻出亦
係其實在情節且彼既以謹守舊約克全信義
為詞自不當逆料其詐拒而不受更行深責也
萬一不獻意圖欺罔則其曲自在俄羅斯彼若

妄生事端則朕可以上告天地而下對臣民再
興師問罪亦未為遲即無知苟安之徒亦無從
議朕為好武矣設從史貽直陳世倌所議且將
遷就隱忍竟若叛賊一入俄羅斯遂無可如何
者所謂嗤面自乾之為朕甚恥之（平定準噶尔方畧）
乾隆帝準噶尔を滅せし時準噶尔より餘
黨阿睦尔撒納と云へる者俄羅斯へ奔に仍
て使者を以て遠阿睦尔を捕めらるへしとの
詔代ありしとの其時臣下等の所存さは
俄羅斯の腹立いとゝ一大事を生ずべしとの
諫云せりされども乾隆帝少も遲疑せず前臣
より茲此と申遣せしに彼弟阿睦尔痘を病て
死す俄羅斯の郎其弟の死を聞て何辛苦
とゝ回回國に交堅固なる旨申ありしを上
諭に趣き此時俄羅斯阿睦尔を捕出さすハ速
其罪を赦し心代すべしと云ふ事申入れし
也乾隆帝威武英断なる俄羅斯も定て畏伏す
へきなりとて阿睦尔出奔に帝直に捕へ

[illegible]ことを恐れ、死後、死骸を送るに、俄羅斯酋長
に状を[illegible]俄羅斯の儀破邪[illegible]
一大事と畏れ、清人俄羅を畏憚する情如
ぬべし

國初有索倫打虎爾二部居額爾古納河及淨
溪里江之地並帰服於太宗文皇帝継因羅殺
築城雅克薩地侵擾索倫打虎尓崇德四年
移駐諾尼江後羅利復来侵擾康熙二十二年
設將軍副都統築城鎮守二十五年發兵進勦
羅利克其城二十八年遣大臣於格爾必齊河
旁立石為界於是索倫打虎爾仍居舊地咸安
業清一統志

太宗崇德年中支繕、明を遠東を攻取るに
ふ未タ北京をごとくなる入しさる時分なり然るに
俄羅斯を猖獗、萌芽畏るべきを甚なり
次ヤ柳唐山を本邦海中獨立の邦に遠
乙北狄を地続の事加古年〻免角北方
ふ起る國に負る者〻遠の時南の方宋を押

付う是又よりて安堵せしめ小恩加けなく女直
らつん起りて遼を滅し金を付遼を北宋
とを併呑し南宋を困しめ元を氣運あり
と思ひしに元又不幸にも蒙古北方に起て金を
滅せり其説を北方に行へは行ほど寒凜陰阻
なり南方に行へは行ほど暖和平易なる我
か彼を攻る新く彼を我を攻る易し北に年
なり海なり象棋と十字ふ有を飛車有
まを王を尉(後)すなり攻(攻)そふ八珠を外殺(殺)を拒
きかなきものなりされ八清朝の代に康熙乾隆
をもて英主おて八幸ふて昏乱無道を
君世を御し國中に内乱なりける折に附込く
侵掠せ八莫大に禍を生すへし初又康熙帝に界
碑を立てよりの後に世中を慮望して深謀
長策を謂つ元を俄羅斯行に八盗
に強大に成必空國家に大患をもあるへと
思ひしかは止事を得さるに計策
亜細亜の北鞬而靼の故を熟名をへりやと云ふ

說となる西方の大国ゝ(匈奴)来侵(雑組の部)
して唐土の住人を遷の人此国の護とす
然る中華の支配うしゝ此国の庶人の中よ
アンカとて人物大高冨一国をかゝむけ
智勇の人物ゝ由于時大よ盗賊蜂起して
大軍よ及ひ擧國騒沸す事の時の護人
も皆賊よ滅亡すアンカ防戦の力尽て始ち
シロシヤ故を乞ふシロシヤ則大数兵を出
して乱を鎮め法を改め政を匡し(上下)

上下を攻問して兵を引揚たりシベリヤの
美民皆其徳を感ずく悉く伏従せるふ
るあるシロシヤの西をひ詰めるハ皆悉
く兵威をいく暴逆を切る又是を名の
兵をおさめとりや (加模西葛牡加國風說考)

右を何年と事ゝふを知ゝされ共伯多孫ゝ
代ゝシベリヤ山郷振院ヤ由なれハ新書に載
する所ゝ空る伯多孫時代ゝ事ゝ扨清朝ゝ
康熙年中ゝ事れゝ康熙を清朝最全

盛ん時節なるに其屬國を奪ひ其守護に
入代るに俄羅斯に大膳不敵畏るべし古
書に糖を舐べし米に及ぶ事なし誘ひ彼清船
こうこ飛ぶ鳥に食され米の処思や
り此清人枕をなふする事なるべし
バヒフこふ役人の咄に拾モンゴル
ホ他せれを大明都ペイキン城取てヲロシヤに
遣るべしこふ由然もヲロシヤまでいたる夫
を申さ決こふ狂又バヒフ一等の人数
まで大明の都ペイキンまもなくとられるべし
玉郎次口書
清朝只今こ強盛にてハ中に一等二等こ人数を
以容易に其都を攻取ること能はず俄羅斯こ大
言こるの輕者に云ふ唐人にこ云を云ふ中に俄羅斯人を
何に少しに共又に有るに右こ言し
り北京こ近る近く東砂葛記に両国交易
場子プチヨウこイフハ
俄羅斯ノ城邑北京ヲ離ル、コト三百里トアリ漂民
紀事ニイルコウワキハ北京こ古北口を出七日行又五十日

設ありて有之と幸太夫伝へ聞き（クワコイ）と唐土へ陸地十日程と伝へ
満洲界より莫斯哥烏ペテルペルクの都を玉
ふ遠く満洲より俄羅斯の都へ攻入る難く俄羅
斯より満洲の都へ攻入る易し満洲にても少し
油断なるべ[illegible]後油断なく俄羅斯が
良将精兵を以て数ふもの有ふ北京を攻る
加ふ[illegible]ずも謂難しババロフより不全を
言も伝へさるや
モンガルを蒙古なり蒙古ハ不残清朝に服属
し清朝にも其酋長を親王杯に封爵し厚く礼
遇せし由なり殊に書に載せるモンガルを七城近
辺に住居する部落なれハ清心伏せきに
対裏切を巧ム社いぶらし予嘗て考へに清主
代々奥意未世薄悪に乱ハ為なる仁徳
を施さんと威武を以て押付る方切に治道を要
と心得属国外夷をあ[illegible]ら[illegible]にも矢張此心持
なくされハ西域を平げく後準噶尔に反し
謀叛せし我憤を士卒に付山に上水に際

人々住居する処をふ[illegible]搜おし一々其壯者ヲ
殺せる凡百餘名人々を右之外まぶ駱駝等
々中に人の男ぶ所ふ[illegible]所右之通
りまて我狄を表向を畏伏さつ[illegible]れと内
心を服すゆきもの中國之人も右同様なれ
ば紅船等に唐人自大明人と称し大清人を稱
貴北京人ハ朝鮮人に冠服をして後渡りと
を人心如此なれハ清朝少も衰滅向て内外
共に土崩瓦解する事目前なり右之訳合

を以て考合すれハモンガル裏切を工みしも其
理なきにあらず

初舎楞嵐入俄羅斯曾向其一再索取俄羅斯
竟未送還設俄羅斯以渥巴錫等叛彼来投向
我求索即以舎楞事折之彼亦無辭以對 乾隆三集
先年日本人使来第同時に大明了使
来聘ましかば 本邦まて交易おけしかば
大明を右川貸さ[illegible]時ハ 川ヶ[illegible]志 江カ ちゑ入
立ちふちゑ入立ちて冠を大明朝鮮清国三

箇國をこゝかゝへ有る川あらば三ヶ国の軍に
も成てもしれぬなり　五郎次口書

キヤフタにおいて交易の次第を大坂の方ゟ
万事合入以前よりも格別に事をいたし候
ヲロシヤの方よりも度々不実なることいたし候の上近
比ツウボリ皮の内には黒猫の皮沢山入大坂
にて渡候ニ大坂の方にて立腹いたし交易
六ヶ年中絶いたし候由之是故ヲロシヤの方
よる勝り大坂とヲロシヤ党軍を起しといふ

是等をことよりおこるなやゝより戦となつてある
大坂には軍戦起さんとおもふ心の人情らく
のさぞくのふるまいなり　仝上

右ニ三条俄羅斯我侵を招子ハ為るの證拠
と成て爰に記し置て録を残し五郎次が俄羅斯
ニ人情を評セしに上に媚るおもむき少し識り過
るに似たり

磐水先生曰く此論據ルヘキカ如シ但彼
此時運ノ衰盛ニ係ルヘシ

滿洲人俄羅斯人氣性之事

清人果敢鷙忍其行軍征敵開拓土彊一以勇敵威斷行之是以所向莫不摧碎震讋俄羅斯深謀匿智不汲々于近功務要遠大其於旁近諸國不背遽以干戈相加必先媾和互市徐乘其釁而取之試使俄羅斯糾合兵衆與清爭一旦之命于中原則俄羅斯決不能抗異日乘清衰弱之日入而代之則不可知故清未必遽能併俄羅斯而俄羅斯未必不終吞清也雖然物有推謝勢有衰盛俄

羅斯能併清則又自應有能吞滅俄羅斯者嗚呼誰也能吞滅俄羅斯者吾能得存而觀也否噫辛未孟秋念八之夕書　俄羅斯紀聞外編序鈔

、予嘗て満洲俄羅斯の人物を評して曰く満洲人は謙信に似て勇鋒あり智鋒あり俄羅斯人は信玄に似て智鋒あり勇鋒あり薩摩人は上方人に似て分別鋒あり又曰く満洲人は薩摩人の如く強弱併せ観つべし臆度なれども

古國の人物を評判するを如此的中せり

やまとの者の間宮林蔵満洲の地に到る満人に面会せし時満人殊に外俄羅斯を賤み且又此の俄羅斯人の領地なりしを追拂く奪ひし抜毎にいくらる東韃記行にも見えたる満人の勇悍の氣性たつて旧し智慮に富みかしこ又たるべし

而又序文末後の論激烈に過きる抜東と盛者也衰の理なれども飛彩なるべき筈

かつ能く南方にてへぴん俄羅斯に代るべき孤
國ホノルルに
磐水先生曰ク俄羅斯紀聞外編序ノ論尤
ノヨウナリ何某ノ作ナルニヤ
評論實ニ切當トイフベシ

俄羅斯交易ヲ彩ル心底ニ事
俄羅斯ハ以前セシ者ニ比ス事ヲ一覽スルに彼
地區内中羅文人ヤツホンスコイと交易決シ後ニ
せし事毎ニ由ヲ曾て羅文人ニ吏言ヲ以て
ス次國こぞつて寒ク欲シ頼ム事ニ尺ヲ其
交易ヲ頼ム意未タ詳ならず世間ニ人ヤ
又俄羅斯米穀ヲ求シ本邦ニ米ヲ買交され
ハ之ヲ餓死ニ及ムベキ是ハ誠ニ乳臭兒ニ譬ヘ
て俄羅斯ニ地球界ニ遍く未穀ニ生する土

地数多ありて且又彼カ常食とする物を変ずるハ
なり沢山なり何を本邦に来て特に以て生活
せんや思ふに其交易を彩に沢を魯西亜深謀
遠慮ある國なれ何事も仁義礼儀を以て接する
諸國と交易ハ幣を重くし礼儀厚くし皆と同
心せめ其間にふと時事を伺ひ名分軍か
ら弾して近隣の弱國をそろく併呑す彩乃
者なる仕方なり（ひの国）（ひく）（ひの国）て莫大なる國となれる
本邦ハ東方礼義を邦並なる國なれハ隣隙を遠ひ
れハ　本邦に限られて他國を聞へしよ為しら
ら浪伝やらん　ヤツホンスコイ　ヨ敷し不義強なる事
も多き中に格に尤甚なる嘆くべきあり　俄羅彩
ら重ずるハ彩事なるを交易ら利を貪
ら（ニ次）ハ難なり（ハ）なり　愚案ら俄羅彩行末ら邪謀
を計りこれら為ら対ら処ハ只本邦ら恩信を
結ひ益義を海内ら弱さんといふ趣意なるべ
磐水先生曰ク大抵高案ノ如クニシテ又然ラサル
アリ差シアタリ交易ヲ求ル「カムサスカ　オホーツカ」

等ノ人民ヲ養ハシカ為ナリ勢ヒ乗ノ漸ク東邊
尽頭ニテ所有トナシ数多ノ官吏ヲ置クヿ
ニ至リシカルニ土地沍寒何ニ一ツ産スルモノナ
シオヒヽく本國ヨリ牛ヲ送リテコレヲ畜養
セシメ又麥ヲ馱送ノ少カヲ人〻ニ給スコレ
亦總國ニ乏ク且年〻豊凶アリ又豊熟ニ
テモ道路險難且其間遼遠ナルヿ數千里海
運モ新都ノ河口ヨリ北海ヲ運漕スルヿニヘ
甚不便サテ土着ノモノヲ使フヿモ約束ヲタ
ガヘテハ服従セズ斯クトリヒロメテ今ハ持アク
ムヨウスナリサテ日本地ハ近ク南ニ向ヘタレハ
入リ易ク且庶物蓄盛ノ國土ナレハ何事モ
得易キヲ知リ成ルヘキハ我ト交通ノ當前
ノ利益ヲ求メタキナリ又我ニ限ラスコノ両
港ヨリ船ヲ仕出シ他ト交易ヲ結ヒ又コノ
上モ遠ク孤立ノ僻嶋ヲモ開拓セントスルニモ
第一其人衆ヲ養フニ事欠クガ故ナルヘシ若
シ昔本國歐羅巴洲ノ西鄙ニ僻在スルノ日何

ソ我美國トイヘ尺本邦ヲ望ムニ意アランヤ二百年前後止白里ヲ經テ所謂ブラーツケヤコート、カムシヤーダニ張出セシ後自ラ南方ニコノ國ヲ隣境トナセシニ其念ヲ生セリ即第二世女帝アンナ、ノ命ニヨリテ元文三年始テ日本支那ヲウカヽウセル為メニオホーツカヨリ船ヲ仕出メ我東海ヲ巡覽セシメタリ其交易ノ品ハ何ゾ米穀ヲ必トセン食糧衣服器財何ヲカ擇ハン五穀ノ外煙草及蔬菜ニテモ麻苧布木綿刀刃木材ノ類何ニヨラス貿易ナシタキナリコレ其侵掠ノ兆ノ北邊諸地一ツモ土産ノモノナク又他ヨリ求ムル所ノモノモ悉ク運轉不便ニメ近隣ナル本邦ニ求ムルニハ如カサルヿヲ預メ知レルナリ今強大何ニ一ツ不自由ナルヿナシトイフハ舊都ノ邊新都ノ間ノヿナリ元来海運ハ不便ノ國ナリペトル帝始テ雪際亜(スウエシア)ノ地ヲ拔キ取リテ今ノ新都ベトルベルグヲ建テシヨリ其子ハトイフ大河ロヨ

リ「オヽストセイ」トイフ海上ノ運遭ノ便利
出來テ他ノ歐羅巴諸國及南亜墨利加洲
諸國ヘモ通商自在ナルヨウニハナレリ地圖ヲ檢
メ知ルヘシサテ差シアタリ如此ノ急務ニメ其真
意ハ折ヨクハ其士人ヲ懷ケ吾屬有トナシ一
統ノ宗旨國ニモナサントスルハ必定コレ祖神ノ法
ヲ固ク守ル國俗ト知ラル深謀遠慮ハコヽニア
リテ先吾國ヘ交通ヲ求ル前件ノ次第ニテ
宗門勸化ハ第二等ナルヘシ因恩惠ヲ結シテ
義ヲ海内ニ顯ンナトイフヿハアルヘシ

俄羅斯敵ゝ國を滅す事
唐土明以来人氣を殘[illegible]ゝ今ゝ清
ゝ其不仁なる事又明ゝ十倍なへゝ其明を亡
ゝ準噶尔を取ゝ抔人を殺しなして土地斗を
取ゝ仕方ゝて郎子ゝ所謂率土地而食
人肉ゝ類なり俄羅斯人ハ先ハ[illegible]ゝ
光也近年雪際亜波羅泥亜抔俄羅斯ゝ戦
ひ土地数多奪ひゝ滅す俄羅斯ゝ
中ゝ抔ゝ拵ゝ見也ゝ[illegible]ゝ勝行如首ゝて和

をたへハ随分是迄許まを故方々二國衰滅
せりといへども今猶存在せるハ俄羅斯
人のみ仁心なるかゆえハ傳世久敵
大國を一時に破滅してハ隣國に考も不服せ
いくかへ姑息をくるやう當時歐羅巴に形勢
周く未七雄と爭ふにより似ら素ハ強しこい
へども六國合從せハ素も滅ぶへし俄羅斯強し
といへども都児格諳厄利亜佛蘭察ホに大國一味
同心ハ俄羅斯もいかてかあらんと何ら

了簡もなく悠々後ろ月日を送るハあゆゑ
油断ならぬなり

（誤ヵ）

盤水先生曰く韃靼ノ殘忍高論ノ如クナル
ヘキカ實ニ歐羅巴ノ人情ハコレト反スルカ
然レ𪜈勢ヒ勢ヒ乘ズルノ日ハ如何アルヘキ
カ鄂羅斯モ時ニスウエーデン」トル」ユ」等と
合戦アリテ和ヲ講シ侵地ヲカヘセシ事モ
アリトキケ𪜈コレハ両雄勝敗相半セルヲ以テ
ノ事カト思フ」出俗人情ニ係レル事𪜈知テ」ス

互ニ數萬人ノ士卒ハ損セシヨウスナリ當今拂
郎察ト羅刹ノ戦軍今ニ於テ勝敗決セス
彼勝此敗此勝彼敗トイヘル風説ナリ拂
郎察獨立テ六国合從ノ如クニモキユヘス拂
郎察ハ古来王爵ノ国ナリシガ一両年来帝
爵ノ國號トモナシリトキケハ強盛知ルヘキナ
リ必ス互ニ盛衰ノ時アルヘシサテ羅刹ハ今世
界三分ノ一ヲ保ツトモイフヘキ盛大ノ鉅邦ナレ
ヒ多クハ不毛荒漠ノ土地多シ從来國盛
ヲ張リ諸国トモ右イフコトク挑戦アリシカヒ
止白里地方ノ如キ蔑俗ノ從服セシメシ如キ
ニハ至ラス今モ其有名ノ諸地ヲ屬セント
ヲ欲シヒ此モ亦恒ニ彼カ威權ヲ挫シト
スル勢止サルヿ右ノアラヿニナリ今ノ支那モ
唐宋アタリヿデノ弱國ナラハ決メ羅刹ニ
勝ツヿ能ワス今韃種ノ清朝トナリテハ勝
敗イカヽアルヘキニヤ今ノ支那王族ノ真
意別ニ具論アリ

一日斷右臂四日斷脚膝

俄羅斯刑罰〻事　未定說

按光大夫物語曰俄羅斯國無死刑無腐刑罪重者役之金銀礦中終身如此而能致治平堯舜之所不及也今閱斯書云上刑一日斷左手臂二日斷左脚膝五日始刎首中刑使罪人仰卧刳其皮自胸達手足不勝痛楚而死輕刑以尖柱貫其肛門両脚繫以鐵石之重柱尖洞腹達咽喉此商鞅李斯之所不敢與光大夫語不啻東西相反蓋光大夫還信羅乂都人之誇言而斯書出於羅乂邊

邑鄙人之語應翻得其實也但刑亂國必用重典
羅利用刑重於東方一彼一此之地而輕於國中
或應有之然斷不至若光大夫之耿言文化甲戌
春二月初三日蠖屈子識　魯齊西國記聞跋

記聞ハ何者ゝ著すゝ所なるゝを知すゝ併き未ゝ
天明六丙午年英國夷地ゝ漂流クナシリて魯
齊亞人二人ゝ日ゝ物語ゝ話を記すゝ云ゝ
ゝあるゝゝハ慥なる實説なるゝ跋ゝ話
ゝ言ゝゝ魯西亞國記聞光大夫物語ゝ刑罰

ゝ輕重ゝ記聞ゝ遠鄙愚直なる
ゝの言ゝゝ有る實説なるゝ欲但ゝ用礼ゝ
礼國を刑するゝ重典を用ゐゝ亂ゝ敎礼
ゝ國を刑罰ゝ重ゝ せられハ畏伏せざるゝ
のゝ如ハ魯西亞東方諸附ゝ國未ゝ心服
せざるゝゝゝハ嚴刑ゝ畏伏せしめ國中
都近邊ゝを刑罰ゝ寛ゝ せしゝや知るゝ
ハ二書ゝ説並び行れゝ悖らざるゝ知ゝ
都近邊ゝ為ゝ往刑ゝ輕くする事光大夫ゝ

中処を宗とし迚に似たり死刑なくて國
家太平と事あるべからず人を傷ること
磐水先生曰く支太支物語一説ナリ唯其
説略メ尽サス環海異聞刑罪篇の説ノ
讀シテ其實ヲ得ヘシイルコーツカニテ親ク見
タル話ナリ都府トテモコレト違ハアルマシ魯
西亜國紀聞何人ノ撰カ其説ク所甚タイ
ブカシ妄誕ナルヘシ彼國典サヨウノコトハ決メナ
キコトナリ或ハ他方ノコトモ混説セルコトト思フル

何レノ国ノ刑法カ知ラズ未タ聞見セサル所昔
刻ノ甚シキモノトイフヘシ
下巻 可刑見 鄂羅斯刑罰極嚴男犯盗女犯姦殺人
不問謀故闘悞以及出邊私入別國者概
以斧刎殺之右西域聞見録ヨリ抜ク
西域聞見録俄羅斯ノ風俗ヲ録セ
シモ全ク信スルニ足ラス此一事魯
西亜記聞ト符合セリ姑録シテ参考
ニ備フルモ亦可ラン 追補

俄羅斯一夫一婦之事
物ゝ俄羅斯ゝ限らず歐邏巴ゝ諸國皆ゝ一
夫一婦ゝ由誠ゝ天下ゝ良法なり然ゝ小俄羅
斯國中只今ゝ此法を堅く守りゝるやゝ未
寡なゝ故五郎次日書ゝ俄羅斯スタロステナゝ
中者子供ある女房家ゝ打捨妾ゝ方ゝ斗
り入込居ゝいまゝ是ゝ考ゝるゝ
ハ一生一婦ゝ制ゝ守らざるゝの有ゝ高ゝ
ゝ表向ゝ妾ゝ立ゝ妾を立てゝ大業ゝ

して門に別に妾宅を構へ都下に所謂囲物
と申候体に候しハるやうなるまし
ハ表裏に通計にて候し唐土に殊なるを申
且又右西洋に法し娶なるなら候ハ天
子法度抑不幸にして子なきまたハ
他姓に国家を形色他姓へとまきさる迄
妹を有る親族に社稷を譲る嘆ハ
ゑに候ハ夫婦和合の道なるハ
夫婦相応の法なく妻面するを何
ぞ妹ときをれハ杖罪とす去して後まゐ
るを初のをしされハ夫に恥を増のみ有
を以て許ふの殆稀なるハ恥
を思ふ夫ハいつとても許へた恥を有さる
妻ハいつとも懲せを有る婦人に物を附ケ
て法外有志もの有り当時俄羅斯
風俗ゆるるやう

ウラブ島在留魯西亜人ワシレイコシニラプ

ストンケレトブセヨリ者セアンエンノウリイナ
トシニシヤアレキセエワウといへる女人を所
持セし事圖ミ其ふ邊要分界圖考ふ西
幸夫を送て来りしアダム船中ふあと
連来りしる一書に尼也書名忘却せ
遠ミ考ふ所に世界亦俄羅斯人あ
ミ証ミ考へし

磐水先生曰ク此話傳聞ノ誤ナルヘシ茂
質カ紀聞ニル不異聞ニ詳ニス歐羅巴ノ

國制妻ヲ有ツモノハ妾ナシ妾アルモノハ本妻
ナシトキケリ若本妻子ナケレハ別ニ妾ヲ
召抱ヘテナリサテ鄂羅斯ニテハ宗法ニ
テ夫婦ノ契約ハ檀那寺ヘ申立住僧其
男女ヲ呼出シ佛前ニ於テ取極メ盟約イ
タサセ両人納得ノ上婚姻取結セルナリ
斯ノ神佛ヘ誓ヲルヲ故離別ノヲ叶ワス
若妻死子ハ再嫁カヲワス夫死セハ女再縁
指支ナシ但夫ト妻ヲ嫌テ離別スレハ再縁

スルヿ叶ワス女夫ヨリ暇ヲモラヘハ尤再縁ス
ルヿアタワス多クハ「ハ三ライ」ト尼寺ヘ行
ル由ナリ妻アルモノ夫アルモノ姦通ノヿアル
ハ私ニ法制ヲ犯スノ一法外ノヿニテ刑
ニ處セラルヽトリ
阿蘭陀ナトニモ吉原ノ如キ所アリ妻ヲ
有タサル内ハ遊行メモ咎メス妻アリテ後
ハ行ヲヿ法度ナリトキケリ

西洋妾ヲ帝號ヲ稱セさる事
家柄格式也弾ヲ外やうのくハ本邦ヲ風
俗ヲ偏屈ニ見ゆるれども正直律義か
る場ヲなるもりナれハモ尾輝虎上杉憲政ヨ
リ管領職ヲ讓られ俄ヲ威勢附ヲ太閤秀
吉已ヲ智勇ヲ以テ天下ヲ掌ニセしヲ足
利義昭ヲ將軍ヲ讓ヲ與ヘヲセし於ヲ足ヲ
〳〵唐土ヲモ簡拙ヲ風俗絶ヲ足ヲ
少し物附ヲハヲ未迄王ヲ帝ヲ成ヲ人ヲさ

のみ恃まさるあり西洋ニハ古ヨリ本邦ニ
風俗ニ似るもの俄羅斯ニ祖ヨハンヲスバシリ
デスニ世迫王國ニて亡しう其比厄勒祭亜國
都児格ニ為ニ滅されル王子二人ニ女子を携へ
く邏馬ニお奔セ俄羅斯王次女クヒアを娶
て妃とシクヒアを厄勒祭亜ニ帝號ヲ厄勒祭
亜ニ寶號両頭ニ就鷲紋を投加ヘ之ヲ俄羅
斯威多つき諸國畏伏せるとそ由又近来五
帝次口書を一覧するに當時ニフランツイ國王

ニ皆を逐ふ商人ニ子ヲ以ておセして王位弑
し自立セし由依てクロシヤ エキリス 支國ヲ
フランツイをエムペラトルニ投ず支とそ軍を起し
て攻し事尺ヘ共エムペラトルハ皇帝ニ位を
いふもや此一事ニて西洋ニ俗尺つ為し
エムペラトルニて魯西亜寄語ヲ魯西亜ヲ
て帝王ニなをゴスダレイムペラトルツコイと
いふなり

盤水先生曰ク歐邏巴洲帝號ノ〻前説ノ

如シ国トヨリ帝爵タリシ國ヨリノ云ヒノ子細
アリテ禪リヲ受ルヿトリ鄂羅斯モトヨリ
然リ近時拂郎察帝號ノ國トナレリトハ
近キヿ故詳ナラヌキカ子氏云ヒノ次第
アルヘシ又聞ク王爵ノ國ヲ屬下トセハ自ラ尊
号ヲ稱メ指支ナキトイヘル国法トモキケリ
但コレハ書策ニテ見名ヿニハアラス
拂郎察當今沓造タリシトイフコト五郎次等
口供ニ見ユ未タ其實否ヲ知ラス他姓ノ人代テ
立ツヿハアルトキケリ拂郎察ナトモ古年サヨウノ
ヿアリシトミヘ何某姓ノ何世ノ王ト分チイフヿ
アリ其君ヲ弑メ代リ立ツヤ又カケカヘイモナ
キ他方ノ人ナルヤホメ詳ニスルヿヲ得ス和
蘭人ニ質サハ知ルヘキナリ若シ他方ノ人ナ
ル片ハ英武ニテサヘアテハ沓造ニテモ其國王共
ナルヘシコレハタシカナル風説吾ニテモ見子ハ定
メカタシ前説ハ古来ノ法制ノヨウニキケリ
イムペラトリ　歐羅巴總洲中通称ノ帝號
ノヿトリ和蘭ニテハケイズルト云

コレハカサールトイフ古言ヨリ轉セリ歐羅巴
ニテ帝爵ノ国ハゼルヽニアナリコレハ羅馬帝
ノ居リ遷セルナリ二百年前後鄂羅斯ハ
コノ国ニ所縁アリテ新ニ称セルナリ一洲中
此ニケ所ノミナリ傳ヘキノ近比フランスモ
右イフ如クトナレハ三帝爵ノ国トナリシト
ミユ鄂語ゴスダレハ尊稱ノ辞ナリト漂客等
イヘリ

莫臥爾之事

佛教ハ山人杯無心無欲なるものゝ学ふハ益
なきにあらす國家を治むるにハ無用之物にして
却る國勢を弱くするなり是ハ曾て儒者之
恒言也真ニ然るにあらす梁武帝并北魏明帝之
時仏教盛にして國衰弱なるも亦あるへし是又
天竺ハ土氣融和にして菓珍寶何一ツ不自由
なき國なれハ自然人氣も怠惰ニなるなりされ
ハ社所大國なれとも古来ゟ蒙古都兒格杯之王

く他國に畏伏せられしより絶えて近年に仏
教廢れ専ら本メットを信向する由に
本メットを教めゆえに
國を一變して強盛の國となる程に良法
なるべし尤今に莫臥児を本蒙古の子
孫なる小方に起り四天竺を一統し伯児西
亜故児格に大國なを攻破り一旦に其鋒
敢て當るよのなりしに元文の頃に
伯児西亜に敗られ帝囚となり土地乱滅削

せ由なれども以前に通ら弱国なるを
乾隆帝準噶尔に乱に乗じ西域を
赤浪へ葉尔羌まてふ入れ早莫臥児と
隣國にて莫臥児の後に地四方にしり
臥児を併呑すべきの勢ひ有り莫臥
児随分強大自立の場所にて清人敢て覬覦
する事なきやうなるや此所の情状皆見を以
て為る能し

一ホメットを教に徳行にて法を生せし人に莫

印度ニ立地ヲ興教ヲ弘メ一ハ行ツ此ヲ始
マルヤ教法ニ語ニ言ホヲ一班ヲモ窺ハ行
ヲモ其大意ニ聞度思フ
磐水先生曰ク此説茂質ホヲ詳ニセサル所
ナリ印度諸国專ラコノ佛法ヲ以テ國ヲ
治ニヤ又コノ教ハ尊信ノ国政ノ一ハ別法
アルニアラスヤ君臣夫婦ノ道モトヨリアリテ
治乱モタヘスアル一ナレハ釋氏ノトケル佛典ノ
如キ事ハカリニテハ刑政行ハレカタカルヘキカ

併ラ印度別ニソレラノ書策ノ譯モナケレハ
知リカタシ近来ハ一ホノ教專ラ行レテ人
デチン佛教一廢レタリトコレモイカヨウノ一
カ政事ト又已ノカ心身ヲ脩ル一モ其中
ニアル一ニヤ一ホノハ世界四教ノ中ニテ亜蠟
皮亜ヨリ起レル道ナリトキケリ支那ニテ
回ニ教ト譯スルモノナリ何レニ簡便ナル法
ノヨウニキケリイカヽノ道教ニヤ見聞ス
ル所ナシ

西洋諸國當時之形勢之事

古書に云く時異なれば勢殊なりと云國と強弱盛衰三十年五十年にして翻然と變革せるもの有り西洋の形勢職方外紀に載せるが如し白石の采覧異言に云一變あり采覧異言の時より近来山村昌永増澤の説に云一變あり夫より後ゆゆ變革せる我伝に云其詳なるを知すべし荒增に云閑ありて後ありて當時俄羅斯に敵對すべき強國を先都児格あり

采覧異言に曰ハ都児格天下第一の強國にして
且大國なる由なれとも少し誉過るを増訳ら
ハ白なり然し地三洲に跨り其國甚多く
近来毎度俄羅斯と大戦なり勝を能ず
とくとも其強項不屈風に恃を尽つ王市
次口書にトロカとヲロシヤと年々軍の由
尺内併考ふ何れも雄を必争ふものなり
然尓馬泥無有名の上國なりしを今ハ俄羅
斯に和睦し且又法國にも和睦し

なるを以なれい数ふ下に其次其外の國都
児格と並稱すきものハ佛蘭察なり
一覧せし五洲次口書不学文盲人に録せしを
のゝ俄羅斯人に大言となり閉誤もなる
きなれと西洋當時の形勢を考るもの是
に近き書なし仍る其間要を摘て録
すを左にめし
フランツイヨの今の王ハ親父を皆城縫て賣
るなり子陛下なり王城教し

已ゝ王ゝ有ゝる由依ゝエキリスゝロシヤゝフ
ランツイ城エムペラトルゝ敗ゝて軍敗る由有
り此節フランツイ兵粮つき軍ゝ負人ゝす
依ゝフランツイ金銀ゝ沢山おしロシヤ大將ゝ
兵粮ゝ買入軍いゝ如ロシヤ方ゝて此節
ゝ兵粮つき負人ゝせしゆへ負てフランツイ城
エムペラトルゝ敗しゝ負ずゝフランツイゝエ
ムペラトルゝ敗ぬる方ずゝて中ゝ城入レ
軍ゝ先止ゝゝ此時フランツイ一世

界ゝ怕ゝ人ゝ多ゝロシヤ迄ゝ引ゝ有ゝ今ハ北ニ
ゝ急度ゝ有れゝ中ゝ出ゝ戦ゝ敗ゝ
しゝゝ有れゝ中ゝ軍ハ止ル有ゝフランツ
イ一世ゝ此一世界怕ル者ゝロシヤ計ゝ
今迄話ゝロシヤ北ニ怕ル一世界ゝ
我物有ゝ思ゝ出ゝ代ゝロシヤ計ゝ
フランツイ同様此一世界凡一万ゝ人ゝ一王ゝ有
ゝ事ゝ此ハ掛ゝ有ゝ推量ゝ
右ゝ佛蘭察ゝ大云ゝ

風勇氣思ひやられく すさまじ 南方ゝ佛蘭察
王匹夫より起り王位に昇く 征ゝ ゝの乱を其
紙君ゝ 流言詐を新 なれゝ 伊 其英武智略唐
土ゝ曹操刘裕ゝ徒 ありけるや 文化十年癸酉
小普請組馬場左十郎 来 ゝて魯西
亜人と面談せしに魯西亜人やせ ハ當時ゝ佛
蘭察王其毛ゝ 短小 て智謀ハ千
人ゝ越へ自分ゝ思業を以て大銃を製し俄
羅斯ゝ軍せ 破り都も焼拂ひ ゝ俄羅

斯敗軍を收めて取て返 此度を佛蘭察ゝ土
地ゝ二城奪ひし 中せ 由又伝て聞け
其言ゝ実否を糺 詳 ざれを佛蘭察王ゝ
英雄ゝる事 ハ疑ひ 有

ボルトカリヤ王の王 フランツイ 責 れ
商人百姓随ふ ハ是 随 國城 南アメリ
カの内バラジリヤゝ ふ 逃 たる跡 ゝ
キリスト教 加 いゝ 右ボルトカリヤ王イスパニヤ
王の二王ゝフランツイ王の末 城 ゝ 延

キリスハ遠ヤクニフランツイヨの外ハフランツイハ
ヘ近ヤクしてハベンカルとハ生ジヨゼフデセワ
トヤ者ヤハエキリスハ名盆ハエウロパ中拂ハ
しめやうとまつ切る城を取ハ其外イタリヤヨ
ハフランツイニ仕捕右ホの役人ハ古主城取返
さんとふてフランツイニ随ひ地ー海の小船
ハ遠近を海を隔れハフランツイ才ハ長崎
ヨト由右のフランツイ一ロシヤとを中ヨリい
ヨリエムペラトル小ヨ敗ハ中エキリスかを見せず

深ク有唯エウロパ中エキリスロシヤフラン
ツイミホとを位を争ひ軍止る事ヨリハ
又尚年フランツイヨロシヤ中ヨリや乱大
軍有りとハ是ハ尚年我ホ彼ホ帆いい
しハを手段を以ヨ

右イタリヤ、ホルトカル諸國ヨ事ニ拂蘭察ヨ
強大我倭有りとハ（横ニテ）諸厄利亜ハ俄羅斯拂
蘭察ヨ云れハホ有り彼ホ形版尾を訳
を一ヨ経魚りを敵近くなる頃一ヨハ海国

水戰ニ長シ

磐水先生曰ク此諸説茂質未タ詳ニスル
ヲ得スロシアトトルコトハ毎度戰軍アリテ勝
敗決セストキュユシカシ近来トルコ敗ヲトリシ
トイフ風説アリサテロシアトイギリストハ一
致メフランストノ大戰アリトキタ両國和平ニ
及サルヨウスナリイキリス海國ナレ𪜈萬藝
ニ巧ミノ航海ノ一コノ国コリ精キハナク軍
事モ極テ巧者ナリ年来佛郎察阿蘭陀

トモ戰爭ヤマズオラングナトハ大ニ掠メラレシト
キュユ尤ロシアトモ戰ヲ挑ントシ大ニ敗ヲ取
リリノ威武ニ屈服シ陽ニ從屬シ陰ニハコレ
カ隙ヲウカヽフヨウスナリ唯今時ハ專ラ
ロシアト一致ノヨウスナリ古今變革ノ一
和蘭ニ便リテキクヨリ外ノ一ナシシカレ𪜈彼
亦本国ノ衰廢ヲ恥ル所アリテ實ヲ明サ
ルニ似タリ先ツ五郎次カ口供新聞ナレ𪜈其
實ヲ聞テ擇スンハ逐一コレニ從フヘカラス